

# 原爆文学研究会報

## 第六二号

原爆文学研究会二〇二一年三月

最大の問題は「忘却」ではない

—「東日本大震災・原子力災害伝承館」・「廃炉資料館」見学記

加島正浩

筆者は二〇二〇年九月二六日に「東日本大震災・原子力災害伝承館」(以下「伝承館」と略す)を、九月二七日に「廃炉資料館」を見学してきた。周知の方も多いと存ずるが、「伝承館」は「福島イノベーション・インフラ構想」の一環で、地震・津波・原発事故の被害を受けた双葉町中野地区に建設され、二〇二〇年九月二〇日に開館された。「廃炉資料館」は、福島原発事故前は富岡町で第二原発のPR施設として運営されていた「エネルギー館」を改装し、二〇一八年一月に東京電力ホールディングス株式会社の運営で開館された。すでに開館から一定の期間が経過し「伝承館」を中心に、一部歓迎する声も聞こえるものの、展示内容への違和感・東京電力および福島県の責任の矮小化・検証の不十分さ・必要と思われる展示内容の欠落・語り部への「検閲」・展示内容への見直しの必要性の提議など、重要な指摘・提言は多くなされてきている。特に福島県在住の記者牧内昇平氏が、「伝承館」の展示物・展示内部の風景を写真に収めることが禁止されていることを受け、館内に掲示されている文章を書き写し、検証を加え、事故以前の地元住民の不安や、いわゆる「自主避難者」(区域外避難者)への言及がほとんどないこと、事故の責任の所在が誰にあるのかが見えにくくされていることなどを適切に指摘し、自身のウェブサイト「ウネリウネラ」でも展示資料の記録一覧

を作成したり、そこに訪れた人たちの声を記録したり、提言を行ったりするなど、非常に重要な仕事を現在進行形でなさっており、私が新たに付け加えるべきことはほとんどない。しかし、同時代言説として「伝承館」への違和感を表明する者の数のなかに加わるのも必要なことかと思いい、以下に感想を記すことにする。

「伝承館」には、原発事故を「天災」として処理したいのだからという印象を抱いた。日本・福島県・東京電力の責任の所在が明確にされていないという段階にすらなく、原発事故の責任を問う視線が皆無なのである。展示を説明するキャプションおよび編集された映像資料からは、地震や津波と同列に、理不尽かつ不幸な出来事として原発事故があったという印象づけようとする意図を感じた。たとえば、事故直後「現場」に居合わせた東京電力の社員や作業員が、全力で事故収束にあたっていたことが語られる展示映像がある。確かにそのこと自体は事実であろう。しかし、東京電力の責任があたかも存在しないかのような展示配置のなかに、その映像資料が組み込まれれば、不幸な偶発的な事故で完全に抑え込むことはできなかったが、それでも全力を尽くした東京電力という印象を来館者に植えつけることは容易であると思われる。

「伝承館」の展示の問題がやや複雑になるとすれば、展示している資料のなかには「事実」とみなせる記録や重要な証言資料、来館して眺める価値のある展示物も存在するということであろう。原発事故直後と以後の印象をある一定方向に誘導したいとき、誰もが否定しようのない(あるいは全面的に否定することが、様々な要因で困難な)「事実」や「証言」を上手く組み合わせることで、施設が誘導したいイメージに厚みを持た

せ、またそのイメージに抗うことを複雑にし困難なものとする。「伝承館」が欠落させているものへの指摘は十分になされつつある。次に必要なことは、「伝承館」がどのような資料とキャプションを組み合わせることで、原発事故以後のイメージを作り出そうとしているか（またそれへの抵抗をどのように困難にしているのか）を分析することであろう。コロナ禍で足が遠のいているが、その点を意識し、再び「伝承館」を訪れることにしたい。

「廃炉資料館」は、原発事故を未然に防ぐことができなかった東京電力の責任を認めているようにも聞こえる映像があり、館内を案内してくれた女性が、事故の発生過程で「メルトスルー」があったことを説明するなど、「伝承館」よりは「マシン」なように思えたが、「廃炉資料館」には、漁業問題（海洋汚染問題）や被災地や被災者の問題に触れた展示がないことへの指摘がすでになされているように、原発立地付近に住む／住んでいた人々が抱える問題に関心を持たせようとする施設ではやはりない。加えて、福島第一原発の敷地内に「処理水」を保管する場所がなくなつたとして、海洋放出を進めようとする為政者と東京電力の二ーズにあわせるように「汚染水」・「処理水」・「トリチウム」について解説する動画やパネルが新設されており、コロナ対策として六〇分のツアー形式での見学となつていたため、それ以上とどまることが難しい（ツアー終了後も勝手に展示を見ることが許されず、案内していた女性が終了後も常に同行する形態。「証言の映像資料まですべて見ると、一〇時間以上かかりますよ」と帰宅を促されたが、私は一日滞在する気満々であった）制限のなかでも、新設コーナーには案内され、「どのように処理するかは、地元住民の方の判断ですので」と明確に述べることは避けていたが、海洋放出でも「問題はない」ように受け取れる説明が行われた。あくまでも「中立」を装う説明ではあったが、トリチウムのみならずALPSで除去できるとは「有毒物質が「処理水」のなかに含まれていた事実<sup>⑧</sup>などは説明されず、海洋放出に反対するのは「風評被害」の問題だけであるかのよ

うに印象づけるものではなく、東京電力の都合にあわせた「プロパガンダ」を行っているように捉えるしかないようなものでもあった。

確かに、両施設の開館を歓迎する声もある。しかし見学しての率直な印象は、両施設とも国・福島県・東京電力の不都合な事実を覆い隠すことに寄与する施設というものであった。東日本大震災発災から一〇年目を迎え、ますます記憶の風化・「忘却」が問題とされている。しかし本当に問題なのは「忘却」なのだろうか。日常に追われるなかで、震災の記憶が遠のいていくのは、人間の「自然」である。だからこそ忘れたときに、思い出せる施設を含めた環境が必要なのだと考える。「忘却」自体が問題なのではない。為政者と大企業に都合よく構成された原発事故後の処理とその後のビジョンこそが「適切」であるかのようなプロパガンダが、「忘却」した人々の頭に流し込まれ、それに抵抗する想像力が奪われることこそが問題なのだ。この点に至るとき、もはや問題は施設の展示にのみには限られない。不可視化された／されていくものへの想像力をいかに涵養していくか。その問題は「文学」の問題でも間違いなくあるはずなのである。

(1) 「東日本大震災・福島第一原発事故伝承館、特別な場所」『ここでしか感じられないものがある』双葉にオープン』『毎日新聞』福島県版、二〇二〇年九月二二日・「東日本大震災10年へ…福島第一原発事故復興へ、和太鼓力強く伝承館など開館祝う双葉」『毎日新聞』福島県版、二〇二〇年一月八日

(2) 武本泰「知る権利の大切さも『伝承』して」『朝日新聞』朝刊、二〇二〇年九月二九日・内田知樹「生きた言葉こそ震災『伝承』する」『朝日新聞』二〇二〇年九月三〇日・力丸祥子・関根慎一「公文書保存や関連死説明、委員指摘の反映は不十分 伝承館展示選定、『議事録』公開」『朝日新聞』福島県版朝刊、二〇二〇年一〇月二四日・三浦英之「伝承館展示『何とも言えない』亡き娘捜した日々、ここが伝えないなら」『朝日新聞』福島県版朝刊・二〇二〇年一〇月二九日、力丸祥子「東日本大震災・原子力災害伝承館 原発事故の教訓、

- もつと伝える展示を」『朝日新聞』夕刊、二〇二〇年一〇月三〇日・「福島・双葉町の『伝承館』語り部に『国・東電の批判禁止』マニユアルには『特定の団体』被災者『ありのまま話せなければ』資料の収集基準未定 教訓残せぬ恐れ」『東京新聞』朝刊、二〇二〇年九月三〇日・片山夏子「ふくしま作業員日誌 50歳男性『伝承館悲惨さ伝わらず』」『東京新聞』朝刊、二〇二〇年一〇月一六日・3・11後を生きるこちら原発取材班「原子力災害伝承館 被災の記録・記憶 伝わらない『現場感』福島・双葉で開館」『東京新聞』朝刊、二〇二〇年一月四日・「反省と教訓が一切伝わらない『伝承館』―原発事故の検証を怠った弊害」『政経東北』二〇二〇年二月号など
- (3) 牧内昇平「『伝承館』はなにを伝えようとしているのか―展示内容の可視化で分かったダメさ加減」『政経東北』二〇二一年一月号
- (4) 「伝承館は何を伝承するのか」『ウネリウネラ』<https://umerinera.com/tag/%F4%BC%9D%E6%89%BF%E9%A4%A8/>
- (5) その点について「も」片山夏子『ふくしま原発作業員日誌―イチエフの真実、9年間の記録』（朝日新聞出版、二〇二〇年二月）に詳しいので、ご関心のある方は参照のこと
- (6) 伊東達也「原発震災と福島の漁業」『いわき文学』第35号、二〇二〇年八月
- (7) 福島第二原子力発電所廃炉情報誌『はいろみち』第21号、二〇二〇年八月
- (8) F O E J A P A N の提言などを参照のこと「ALPS処理水、ヨウ素129 などトリチウム以外核種の残留」『説明・公聴会』の前提は崩れた」二〇一八年八月二九日、<https://www.foejapan.org/energy/library/180829.html>

## 第六二回 原爆文学研究会報告

二〇二〇年二月一九日（土）、第六二回原爆文学研究会が、前回に引き続きオンラインで開催されました。膝をつき合わせての懇親会が無いのは寂しいですが、遠方にお住まいで、普段は研究会参加が困難な方が気軽に参加できることもあり、盛会となりました。

今回は研究発表二本と、岡村幸宣さんの『未来へ 原爆の凶丸木美術館学芸員 作業日誌2011-2016』（新宿書房、二〇二〇年三月）の合評会、という内容でした。最初の発表、後山剛毅さんの「戦後原民喜作品における自然―人間との関係をめぐって」は、後山さんが取り組んでおられる戦後原民喜の散文を丹念に読み解くというものでした。ちょうど一年前、第六〇回の研究会で、後山さんは「原民喜の『人間』論」と題して発表されました（活字化されたものが『原爆文学研究』第一九号に所収）が、今回のご発表はその延長線上にあるものです。原の言う「新しい人間」のありようを、作品に即しながら分析した、興味深い内容でした。発表後にはさまざまな観点から質問が出され、この問題の奥行きを深さを実感させられました。

二つ目の発表は東村岳史さんの「岡正治試論―本島等長崎市長との相違点を中心に」。牧師であり、長崎市議会議員でもあった岡の功績を、本島等批判という文脈から鮮明化した内容でした。岡まさきは記念長崎平和資料館の展示内容に明らかなように、岡は日本人の加害の側面を前景化しています。本発表はさらに、核や宗教との関わりなど、岡の足跡を掘り下げて考察し、その思想的、政治的位置づけを試みる意欲的なものでした。

休憩の後、『未来へ』の合評会となりました。楠田剛士さんが司会となり、まずは柿木伸之さん、そして水溜真由美さんが書評のコメントを行い、それに対する岡村幸宣さんからのリプライがありました。この書

からは、原爆の岡丸木美術館の学芸員である岡村さんが、さまざまな領域の方々との繋がり、ネットワークを築いてこられたこれまでのご努力と、それを可能にしたお人柄がよく伝わってきます。コメンテーターのお二人の書評も、本書の意義を再認識させてくれるもので、さらに質疑の時間も非常に充実したものとなりました。その際に高野吾朗さんも言及されましたが、二〇一六年最後の記述は、私(野坂)にとっても特に印象深く、いつまでも心に残る内容でした。

◇研究発表

## 戦後原民喜作品における自然

——人間との関係をめぐって

後山剛毅

本発表は、戦後原民喜作品における自然描写を、「人間」との関係から再考することで、原民喜と原爆体験の記憶の言語的な表現に迫るものである。戦後の原民喜はおもにふたつの大きなモチーフのあいだを揺れながら創作活動をおこなっていた。それが人間と自然である。なかでも原爆体験の以後に誕生する「新しい人間」は、戦後原民喜作品の中心に居座っていると考えられ、それは原子爆弾の結果として得られたただの奇怪な空想ではなく、まさに原子爆弾によって物質レベルの変化を遂げた結果であり、その効果としてある種の〈狂い〉として〈言語〉偏重となってしまう装置を身体内部に装填されてしまった〈人間〉である。しかしながら、その言語的な装置の問題と原爆体験の記憶の関係については十分に論じられていない。発表者は、原民喜が描く〈自然〉こそが原爆体験の記憶と原の言語的な表現を結びつけるものと予想した。

そこで、本発表では、原民喜が作品のなかで度々描いてきた地球上の

自然あるいは動植物の描写を頼りに、原民喜が原爆体験の記憶と言語をどのように関連づけていたのか、そのつながりを複数のモチーフを紐づけることで素描した。原民喜は、〈言語〉あるいはその集合である〈小説〉が、作者である〈人間〉を食い破ってしまうことを想定しつつ創作していた。その反面で、言語的な過剰さは、〈冷却機能〉とも呼ばれる自動的な制御装置の作動によって、臨界点を迎えないように設定されている。この言語の二面性によって、原民喜作品のなかで言語的な思考は沸騰しつつも、常に冷却されることで、ある形を保っている。本発表では、このことを原民喜による原爆体験の記憶の「書きのこし方」の独自性として示し、このような方法こそが、一方で「このことを書きのこさねばならない」と記しつつも、他方で原爆体験を無制限に繰り返す装置である「原子爆弾記念館」を「呪うべき装置」と揶揄する原民喜の原爆体験を記憶へのアンビバレントな態度につながっていることを提示した。

質疑応答を通して、本発表の明らかにした結果が、より広く原爆体験を取り巻く文化現象のなかでどのように位置付けられるのか、また、より具体的に原民喜の言語に対する考えがどのようなものであったのか、の二点について、掘り下げていく必要性を感じた。

◇研究発表

## 岡正治試論と今後の課題について

東村岳史

当日の報告では、岡正治が残した『岡まさとはるとともに』(後『長崎市政研ニュース』)およびその他の資料に依拠し、主に岡と本島等長崎市長との関係を対比的に論じた。天皇の戦争責任発言などで全国的にも比較的注目されてきた本島に対して、着目されることが少なかった岡の思

想に光を当てたかったというのが報告の出発点である。核の「平和利用」や「唯一の被爆国発言」をめぐる認識、忠魂碑訴訟、本島の天皇責任発言に象徴されるように、岡と本島の間には相容れない対立があり、両者の関係に焦点を当てて考えることで、これまでの先行研究では見過ごされてきた岡の活動の意義を一定程度明らかにできたと考える。

ただ、限られた資料をもとに議論を単純化してしまったきらいがあるのは反省点である。また、私自身、両者の関係は必ずしも対立的な側面ばかりではなかったと想像するし、表面的な言論をなぞるだけでは把握できない部分が多々あることは自覚している。岡のように実践的な活動を行なっていた人物を理解するためには、文字資料だけでは限界があることはたしかであろう。その点については、当日の質疑応答でいただいた疑問やアドバイスは厳しくもありがたい苦言として受け止めたい。たとえば、岡自身のキリスト教徒としての立ち位置や教義についての考え、長崎における岡の評価（メディアや信者たちとの関係など）、政治的左派とのつながり、朝鮮人以外の外国人被爆者に対する取り組み、運動の成果に対する評価、などである。今後は、生前彼と活動を共にした人物へのインタビューや他の資料の発掘を通して、岡の思想や政治活動の具体的な掘り下げをはかることを目指したい。特に、岡が思想の「正しさ」を追究するあまり厳格主義に陥っていたのではないかという見解や、「正しさ」ゆえに運動の浸透や継承という点では制約があったのではないかという指摘にはうなずけるものがあり、今後の課題としたい。当日ご意見をいただいた方々に感謝申し上げます。



◇合評会  
(書評1)

## 非核の未来へ言葉を渡し、

### 命をつなぐ手仕事の記録

柿木伸之

岡村幸宣さんの『学芸員作業日誌』は、東日本大震災が起きた二〇一一年三月十一日に始まる。この日誌に記された言葉には、丸木位里と丸木俊の「原爆の図」のみならず、「三・一一」以後の現在にその精神を受け継ぐ作品の数々をも観る者に届ける原爆の図丸木美術館の学芸員の手仕事の痕跡が刻まれている。日誌の前半には、そのような「非核芸術」——目に見えない核の脅威を可視化しながら、それに対峙する記憶の芸術と仮に定義しておく——の作品の展示を準備する「作業」が、後半には「原爆の図」を、海を越えてアメリカとドイツへ届けるための旅の記録が主に記されている。

そのような『作業日誌』の書評の機会を得た背景に、筆者が在外研究中だった二〇一六年の秋に、ミュンヘンのハウス・デア・クンストで開催された「Postwar——太平洋と大西洋のあいだの美術1945-1965」を観たこともあると個人的には考えている。合評会では、世界戦争の衝撃の反響も示す戦後の二十年間の美術の展開を、世界的な文脈で問うこの大規模な展覧会に、「原爆の図」より第二部《火》と第六部《原子野》が展示されたことにより、この作品を、世界的な「非核芸術」の系譜に位置づけつつ、政治的な運動とも結びついた戦後の美術の新たな姿を示すものとして読み直す地平が開かれたことに触れた。

『作業日誌』に綴られているのは、「三・一一」以後の表現とも対話しながら、「原爆の図」を絶えず新たな文脈のなかで読み直す旅である。

そこには、一人ひとりの作家に真摯に向き合いながら、命あるものへの細やかな眼差しを「原爆の図」から受け継ごうとする岡村さんの姿勢が滲み出ている。そのような旅を辿る機会を得たのは貴重だった。また、合評会の場で、「原爆の図」を戦後文化運動のなかに位置づけ、「アジアの女たちの会」の活動とも接続させる水溜真由美さんの読みの視角にも接することができたのも刺激的だった。こうして得たものを、今も続く「核の普遍史」とも言うべき歴史に立ち向かいながら、非核の未来に開かれた生存の道筋を過去から見通す歴史の構想に生かしたいと考えている。

(書評2)

## アートと「政治」が交差する場

水溜真由美

本報告では、岡村幸宣さんの『未来へ 原爆の図丸木美術館学芸員作業日誌』について、四点の感想・コメントを述べさせていただきました。第一に、岡村さんの『原爆の図』全国巡回展についてのご研究を思い起こしながら、岡村さんの学芸員としてのご活動が戦後文化運動を継承するものであることを指摘しました。第二に、「学芸員日誌」が、東日本大震災と福島原発事故の発生した二〇一一年三月一日から始まっている理由について、三月一日が核の問題にアプローチする場としての丸木美術館の存在意義を再認識させた日だからではないかと述べました。第三に、丸木美術館の存在意義の一部は、行政や企業の財政面の支援がないことで担保される自由によるものだとこのことを指摘しました。そのことは、福島原発事故の後、丸木美術館が企画展「緊急開催・チェルノブイリから見えるもの」を開催する一方で、目黒区美術館の「原爆を視る」展が中止を余儀なくされたことからうかがえます。第四

に、一九五〇年代の戦後文化運動では密接な関係にあった文化と政治が、一九六〇年代以降は徐々に離れていったことを思い起こしながら、今日において、文化と政治が再接近することの意義について問題提起しました。

岡村さんによるリプライの中で最も印象に残った点は、私の感想・コメントの四点目に関わるものです。岡村さんは、東村岳史さんのご報告の中で取り上げられた岡まさはる記念長崎平和資料館をめぐる状況とも重ね合わせながら、美術館と「政治」の関わり方の難しさについて感想を述べてくださいました。政治的なメッセージや「正しさ」に過度にこだわれば、多くの人は美術館から背を向けてしまうというのです。このご発言をうかがって、アートと「政治」の関わりをめぐる日本の市民の感覚が、より成熟する必要があるように思いました。私見によれば、政治的メッセージを、遊びを含んだ多様な形で伝達できるのがアートの魅力であり、またアートには既存の「正しさ」の硬直性や一面性を相対化する力もあると思います。かつてベルリンでアンチ・モニュメントとも呼ばれる記念碑を見て、アートと「政治」の豊かな関係に強い印象を受けたことを思い起こしました。

岡村さんの試行錯誤を含んだご活動は、丸木美術館がアートと「政治」が交差する貴重な場であり続けることに大きな役割を果たしていると思います。

(リプライ)

## 手の痕跡を残した記録を「未来へ」放つ

岡村幸宣

拙著『未来へ 原爆の凶丸木美術館学芸員作業日誌 2011-2016』は、二〇一二年三月一日、東日本大震災の発生した日から始まり、五年

後の二〇一六年秋までの原爆の凶丸木美術館の学芸員としての活動をつづった日誌である。

震災にともなう東京電力福島第一原発事故は、丸木美術館に大きな影響をもたらした。まずは目黒区美術館で予定されていた「原爆を視る」展の中止。そして新たな表現者たちの丸木美術館への参入。それは、行政や企業の支援を受けていない美術館が、核をとりまく言説へのさまざまな圧力が強まる時代に、どのように「しがらみのない自由」を生かしていくかの模索でもあった。同時に、過去の「非核芸術」の系譜を振り返り、「原爆の凶」を現代社会に接続させていく試みにもなった。

二〇一五年には、米国のワシントンDC、ボストン、ニューヨークを巡回する「原爆の凶」の展覧会が実現。二〇一六年にはドイツ・ミュンヘンの「戦後」展に二点の「原爆の凶」が招致され、世界的な文脈の中で「原爆の凶」の位置を考える機会になった。被爆から七〇年という歳月が経過し、原爆の記憶の「風化」や「継承」の問題が注目されるなかで、「原爆の凶」を常設展示するために半世紀ほど前に開館した丸木美術館の活動もまた、変化の時期を迎えようとしている。

将来的に重要な意味をもつかもされない六年間の濃厚な日々の記録を、早急に結論づけることなく、携わった者の「手の痕跡」を残した状態で「未来へ」放つために、今回は日誌という形式を選択した。その試みが成功しているかどうかはわからないが、著者としては、この六年間でなければ記録に残そうとは思わなかったと感じている。

合評会を企画してくださった楠田剛士さんはじめ、多忙にもかかわらず丁寧に書評をしてくださった柿木伸之さんと水溜真由美さん、そして合評会に参加し、多くの質問や感想をくださった皆さまに感謝します。研究会でいただいた課題や刺激は、常にその後の仕事の中で繰り返し考え、生かしてきました。これからもそうありたいと思っています。

後日談になりますが、相川美恵子さんは翌週に行われた児童文学評論研究会でも『未来へ』を取り上げて報告してくださったとのこと。美術

や原爆文学という専門的な枠を越境して、児童文学に関心をもつ皆さまにも共有していただけたことを、嬉しく思っています。

## 機関誌「原爆文学研究」第二〇号原稿募集

本研究会が年に一回発行している機関誌「原爆文学研究」の二〇号の原稿を左記の要領で募集します。この機関誌には「原爆文学」の評論の他、エッセイも掲載します。奮ってご投稿ください。

○書式 縦書き、二九字×二五行、二段組。

○投稿締切 手書きやプリントアウト原稿で投稿の場合は二〇二二年九月中旬、データファイル（Wordか太郎）を添付して投稿の場合は同年九月三〇日。

○発行経費 投稿者は、各自の原稿一頁（機関誌の書式）につき、一〇〇〇円を発行経費として負担する。

○投稿宛先 〒八八〇―八五二〇 宮崎市船塚一丁目一―一  
宮崎公立大学人文学部 楠田剛士研究室

## 彙報

第六二回原爆文学研究会

○日時 二〇二〇年十二月二十九日（土） オンラインにて開催

○研究発表

戦後原民喜作品における自然——人間との関係をめぐって

後山剛毅

東村岳史

岡正治試論——本島等長崎市長との相違点を中心に

学芸員作業日誌2011―2016』

柿木伸之・水溜真由美・岡村幸宣

## 編集後記

二〇二〇年に発足した原爆文学研究会も、今年で二〇年目を迎えます。世話人会で話し合い、会員の皆さまにもお諮りしておりますが、「原爆文学研究」第二〇号発行を一つの区切りとし、現在の会のあり方を見直すこととします。そのこともあり、第二〇号にはできるだけ多くの方にご執筆いただきたいと思っておりますので、ぜひ積極的な投稿をお願いします。

コロナウイルスは、移動・旅行の制限により人間同士のコミュニケーションや関わり合いを妨げ、孤立化させます。オンラインでの会議や飲み会では、コミュニケーションの質がパソコンのCPUやネットワークの通信速度といった数値に還元され、人間の疎外が進行するのでは、とも感じられます。オンラインでこぼれ落ちてしまうものをこそ、大事にしなければならぬと思う今日この頃です。

とは言いつつも、第六三回の原爆文学研究会もオンラインでの開催となります。オンラインのメリットを活かし、普段なかなか会に参加できない方々にも、ぜひともご参加いただきたいと思います。画面越しとはなりますが、元気なお姿を拜見できれば嬉しい限りです。なお、日程は五月二日（日）、連休中の予定。詳細はホームページでお知らせします。

（野坂昭雄）

発行元 原爆文学研究会事務局

〒八八〇―一八〇 福岡市城南区七隈八一―一九一

福岡大学人文学部中野和典研究室内

tel 092-871-6631（代表）

e-mail nakanok@fukuoka-u.ac.jp

URL <http://www.genbunken.net/>